

セミナー2「英學史に於けるシェイクスピア（沙翁）」

コーディネーター： 村上 健（津田塾大学教授）
メンバー： 鵜澤 文子（東京女子体育大学教授）
内丸 公平（東洋大学助教）
近藤 弘幸（東京学芸大学教授）
高橋 百合子（津田塾大学非常勤講師）
増田 珠子（駿河台大学教授）
森 祐希子（東京農工大学教授）
ゲスト・スピーカー： 川戸 道昭（中央大学教授）

「明治百五十年」を翌年（2018年）に控え、このセミナーでは、従来の翻案・翻訳・上演を主とした「シェイクスピア受容史」研究から、他の関連領域（新聞雑誌史・英語教育史・娯楽芸能史・研究史など）も含む「英學史＝広義の外国文化受容史」へと研究の射程を拡げることが基本方針として、明治期（及び大正・昭和前期まで）を中心に発表を行なった。また、どのように「百数十年前の日本に於けるシェイクスピア受容史関連分野」を整理研究するかという問題を抜本的に検討する為、約400年前の歴大な英国ルネサンス演劇関連資料を細部に渡って集大成しようとする Martin Wiggins, "British Drama 1533-1642: A Catalogue" (OUP; 既刊8巻、全10巻予定) が着実に完成に向かっている現状を踏まえ、広義の書誌学的方法論を徹底させて、当時の第一次資料（+それに準ずる資料）を出来るだけ体系的に明示することを参加者共通の目標に設定した。

ゲスト・スピーカーとしてお迎えした、『明治のシェイクスピア《総集編》』2巻（2004年）の著者・川戸道昭氏（中央大学教授）に冒頭の「総論」をお願いし、下記のセミナー参加者（6名）の発表に村上のコメントを適宜差し挟む形で進めたが、基本的には各発表内容を時系列で並べ、「総論から各論へ」議論が展開するように配慮した。また、セミナー後半では、フロアから「大都市と地方でのシェイクスピア受容の関係と差異」といった問題提起もあった。以下、各発言者から寄せられた「発表要旨」を尊重しつつ、全体をまとめておきたい。

【川戸道昭氏】本発表では、上記の基本方針に則して、「『英学』の視点から見た明治のシェイクスピア」について概観した。具体的には、「英学」という視点を導入することによって、西洋を手本とする新たな舞台芸術が日本の土壌に根を下ろしていく過程の全体像が見えてくるということ、坪内逍遙の英語・英文学修業を例に概観した。彼の愛知英語学校や東京大学での英語・英文学の学習経験から新たな「朗読法」「朗読会」が生まれ、やがてそれが「易風会」や「文芸協会演劇研究所」へと発展していく。要するにそれは、シェイクスピア文学の吸収・理解という input の部分とそれに基づく創造・発展という output の部分は切り離して考えることは出来ないということの一例といえる。本発表では、そうした識者たちの学習から創造へと至る流れに光を当てる一方で、それだけでは捉えきれない様々な要素（例えば外国映画を通じた受容等）にも注意を向けて、新たなシェイクスピア受容史を体系的に編成し直すことの必要性を概説した。

【近藤弘幸氏】明治時代における「活字になった『ロミオとジュリエット』」（翻訳・翻案の新聞・雑誌掲載や単行本としての出版、雑誌記事、上演台本や劇評など）について、整理・検討を行ない、次の三点を指摘した。
①『ロミオとジュリエット』といえば、いわゆる「バルコニー・シーン」が有名であるが、明治の人々の心をとらえたのもやはりこの場面であった（紹介や抄訳が第2幕までに集中している。例外的なのが坪内逍遙で、早稲田大学出版部から単行本を刊行する前の雑誌『新小説』における宣伝の一部先行公開（1910年）に、第4幕以降を選択している。このことは、次に述べる「受容のモードの変化」と無関係ではないだろう）。②1887(明治20)年頃に受容のモードが変化している（「紹介」から「本格的」受容へ／「漢学」ベースから「英学」の誕生へ）。③初期の「紹介」は、報知新聞関係者（＝福澤諭吉人脈）に集中している（『ロミオとジュリエット』の政治的受容の可能性）。

【増田珠子氏】「子ども」と「シェイクスピア」をキーワードに明治・大正・昭和前期までにどのような記事・著作が発表されていたかを整理するなかで、シェイクスピアの作品が子ども向けに翻訳・翻案されているほか、非常に早い段階から、数多くのシェイクスピア伝が児童雑誌の記事として、また単行本の形で書かれていたことが明らかになった。当時の被伝者は富国強兵や立身出世を是とする時代風潮を反映して軍人や政治家が多いが、そのなかでシェイクスピアは、豊かな少年時代から一転して不遇に陥るものの、ロンドンで努力の結果成功をおさめ、ついには故郷に錦を飾ったという点に焦点が当てられ、被伝者としてゆるぎない地位を誇っていた。日本が近代化を目指すなかで子どもたちがモデルとすべき偉人として、シェイクスピアは繰り返し取り上げられている。日本の子どもたちと「シェイクスピア」との出会い、作品のみならず「伝記」を通して始まったのである。

【内丸公平氏】文部省の検定英語読本（中等生用リーディング教科書）は、多くの日本人に初めてシェイクスピアに触れる機会を与えていたにもかかわらず、これまでほとんど注目を集めることはなかった。そこで、本発表では、どの位の数の英語読本に、どの位の数のシェイクスピア作品が、どのような形で掲載されていたのか、その統計を出してみた。1887(明治20)年から1946(昭和21)年までに認可された国産英語読本を調査した結果、少なくとも160の教科書に、少なくとも250のシェイクスピア関連作品が掲載されているが、最も人気のテキストはシェイクスピアの伝記であり、次いで『ヴェニスの商人』『テンペスト』『リア王』他と続く。シェイクスピアは徳育の範を垂れる偉人として紹介され、『リア王』はハッピーエンドの孝養の物語に翻案されていたことが示すように、その紹介は徳育を重視した近代日本の教育政策と深い関わりがあったのではないかと推察される。

【鶴澤文子氏】明治期の文部省検定英語読本・副読本で扱われたシェイクスピアの作品のうち、最も多く取り上げられたのは『テンペスト』であり、すべてラムの物語に基づいていた。しかし、同じく検定図書で扱われた『リア王』や『ヴェニスの商人』とは対照的に、『テンペスト』は大正期になるまで上演の記録がない。教材となったシェイクスピアは教科用図書の外でどのように受容されていたのか、『テンペスト』を軸にして「読むシェイクスピア」という視点から考えた。明治期に活字になった『テンペスト』は、1888(明治21)年8月を初出として全部で9件。1912(明治45)年2月の坪内逍遙（『早稲田文學』）以外はすべてラムに拠るものである。明治20年代と比較して、明治30年代後半にはシェイクスピアの原作とラムは別物という意識があったことが分かる。シェイクスピア作品の上演が増えてきたこの頃、親しみやすいラムの物語が活字として提供される一方で、シェイクスピアの原作を読む、研究対象として捉えるという流れが次第にはっきりしてきたのではないかと推察される。

【村上配布資料】翻案なども含むシェイクスピア作品の上演記録を調査する際に重要な基礎資料となるのは多種多彩な「芝居番付（類）」だが、1960年代以降、各地で徐々に出版され始めている「番付目録」などの貴重な研究成果を取り入れた「上演年表」は未だに発表されていない。勿論、この種の第一次資料を集大成するのは極めて困難な作業だが、（海外も含む）各地に残存する番付類の調査だけでなく、それらを目録としてどう転記・整理するかという難しい問題もある。また、それと並行して、沙翁劇上演に関係するあらゆる諸記録（関係者の回想録なども）を収集・整理する作業も不可欠であろう。（配布資料では、1903(明治36)年8月8日に横浜の喜楽座で上演された高安月郊の『悲劇 闇と光』（『リア王』翻案）の番付と彼の回想を比較例として挙げた。）

【高橋百合子氏】本発表では、明治期の翻案を含めた数多くのシェイクスピア作品上演のうち、1909(明治42)年から1912(明治45)年にかけて他の作品に比べて上演回数が多く、1911(明治44)年には上演台本も出版されている、小島孤舟による『アテネのタイモン』の翻案『響』をケーススタディとして検討した。原作は現代でも決して人気のある戯曲ではないが、孤舟の『響』は、原作からかなり改変がなされており、シェイクスピアの翻案というより、むしろ新派劇と考えられる作品である。それぞれの上演について、現存する番付、新聞広告、新聞評、雑誌記事、舞台写真などの一次資料を示し、それらを比較検討することを通して、明治末期に、独自の伝統を持つ日本の演劇界において、シェイクスピアのひとつの作品がどのような形で受容されていたかを考察した。

【森祐希子氏】シェイクスピア受容の重要なファクターであるシェイクスピア映画について、英学史という見地から考えようと試みた。今回は明治・大正期を中心に、国外で制作されたシェイクスピア映画の日本での上映状況を調査して基礎資料とし、この時期におけるシェイクスピア映画の受け止められ方、日本のシェイクスピア映

画制作への影響を考えることを目指したが、一次資料にあたり、どの映画がいつどこで上映されたのかを確定しようとすると、これまで信頼度が高いと思われていた日本のシェイクスピア映画上映史に、実は確定できていない部分が少なからずあることが見えてきた。その解決策として、国際的なシェイクスピア映画研究の成果を重ね合わせることで、日本における資料だけでは確定できなかった部分に修正、あるいは少なくともある程度の限定を加えることができることを示した。

これらの発表を通して、第一次資料調査を初めとする「シェイクスピア受容史」の書誌学的基礎研究が未だに不十分であることが広く認識され、「英學史に於ける沙翁研究」の射程が更に広がることを願っている。

